



南葵音楽文庫ミニレクチャー

日本オルガン界の泰斗

木岡英三郎

～南葵音楽事業部評議員・主任オルガニスト時代～

林 淑 姫

2019年11月8日（金）18：15

南葵音楽文庫閲覧室（和歌山県立図書館内）

南葵音楽文庫

和歌山県立図書館内

和歌山市西高松 1-7-38

tel.073-436-9500



木岡英三郎
(1895-1982)



愛用のオルガン

(オランダ・フェルシュレーン社製)

徳川頼貞は1926（大正15）年、前年に創設された南葵音楽事業部の評議員会に、6年余にわたる欧米留学から帰国したばかりのオルガニスト木岡英三郎を評議員兼主任オルガニストとして招いた。本格的なオルガン奏者がまだ生まれていなかったその時代、南葵楽堂のパイプオルガン（アボット・スミス社製）は十分に能力を発揮していたとはいいがたく、アメリカ、フランス、ドイツで当代の名オルガニストたちに師事し研鑽を積んだ木岡を得て、頼貞の喜びは一入であったと思われる。南葵楽堂のパイプオルガンは関東大震災後東京に残された2台のオルガンのうちのひとつだったが、楽堂自体が損壊し演奏会場として使用することはできなくなっていたこともあって、木岡英三郎の帰国後最初の演奏会は立教大学チャペルで開催された（アメリカ・エステー社製オルガン、1921年設置）

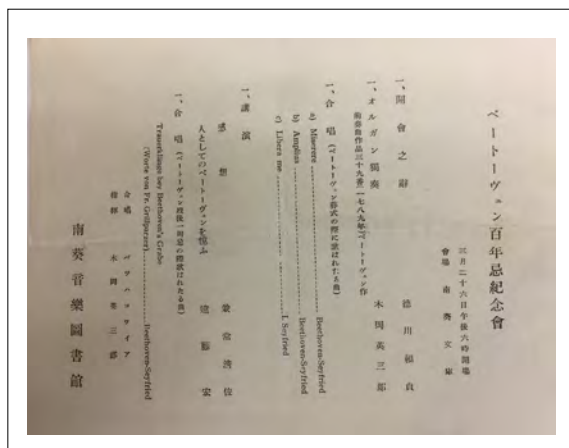
1927（昭和2）年、ベートーヴェン没後100年の命日（3月26日）に、南葵音楽図書館主催により開かれたレクチャー・コンサート「ベートーヴェン百年忌記念会」は木岡の企画によるもので、曲目はベートーヴェンのオルガン曲《プレリュード》（作品39）と合唱曲で構成、演奏は木岡の独奏と、木岡指揮による混声合唱団「バッハ・コアイア The Bach Choir」によった。合唱曲はベートーヴェンの葬儀と一周忌で歌われた作品という凝った曲目が選定されている。「バッハ・コアイア」は木岡により結成されたばかりの合唱団で、1929年、木岡の指揮により「ヨハネ受難曲」が初演された際、「バッハ聯合 The Bach Union」の一員として参加している（のち教会合唱団）。こうした木岡の精力的な活動に対して、同じく南葵評議員を務めていた辻莊一も積極的に協力している。

南葵のオルガンは1928（昭和3）年、昭和の大札記念に東京音楽学校に寄贈されたが、その移築には木岡の協力が不可欠であったであろう。木岡はその後東京音楽学校のオルガン教師に就任、以降多くの大学や団体で後進の指導にあたることになる。

次頁に掲げた略年譜から分かるように、オルガニスト木岡英三郎の教会音楽とオルガン音楽の普及、発展に向けられた熱意と精力的な活動は生涯たゆみなく続けられ、日本オルガン界の礎は彼によって築かれた。オルガン音楽に対する確固とした歴史観に基づくその活動は、私たちに畏敬の念を懐かせずにはおかない。

【参考文献】

森田真理子「木岡英三郎—日本におけるオルガン開拓者、その伝記と揺るぎない遺産」『オルガン研究』38号（2010）
「木岡英三郎—パイプオルガンの巨匠」（『明治学院150年史 主題編』（明治学院2014）
赤井勲『オルガンの文化史』（青弓社1995）



ベートーヴェン百年忌記念会

1927（昭和2）年3月26日 於・南葵文庫

ベートーヴェン「前奏曲」（作品39）ほか。木岡英三郎、オルガン、指揮、合唱「バッハ・コアイア」

講演 兼常清佐、遠藤宏
南葵音楽図書館主催

木岡英三郎略年譜(稿)

1895(明治 28)年 3 月 31 日、広島に生れる。広島高等師範附属中学校卒業後、県下の小学校に勤務。アメリカ人宣教師ヘレフォード W. F. Hereford よりキリスト教の教えと音楽を学ぶ。1910 年頃、受洗。

1915(大正 4) ヘレフォードの勧めにより上京。明治学院高等学部(神学部予科)に入学。

1917(大正 6) 在学中に東京音楽学校を受験、入学。オルガンを島崎赤太郎に、ピアノをショルツ Paul Scholz に学ぶ。

1920(大正 9) 田村寛貞(東京音楽学校ドイツ語教師)の助言を得て留学を決意。渡米。10 月イエール大学入学。オルガンと音楽理論を学ぶ。

1924(大正 13) コロンビア大学で、セス・ビンガム Seth Bingham に師事。11 月、渡仏。パリ・スコラカントルムに入学。オルガンをルイ・ヴィエルヌ Louis Vierne、作曲をヴァンサン・ダンディ Vincent d'Indy に学ぶとともに、シャルル=マリ・ヴィドール Charles-Marie Widor のレッスンを受ける。

1925(大正 14) パリを離れ、帰国の途につく。途次ライプツィヒに立寄り、聖トーマス教会オルガニストのカール・シュトラウベ Karl Straube のレッスンを受ける。

1926(大正 15・昭和 1) 1 月、帰国。6 月、帰国後最初のリサイタル(第 1 回コンセール・スピリチュエル)開催。バッハ《トッカータとフーガ 二短調 BWV565》《ファンタジーと大フーガ ト短調 BWV542》、フランク《コラル イ短調》、ヴィドール《オルガン交響曲第 5 番》(抜萃)など演奏。南葵、立教大学礼拝堂のオルガニストに就任。基督教出版社を設立、自ら訳詞にあたる。(以後ヘンデル「メサイア」、フォーレ「レクイエム」、ハイドン「天地創造」をはじめ、オルガン曲集、合唱曲集など、生前に 40 巻 80 曲以上を刊行)

1927(昭和 2) 混声合唱団「バッハ・コアリア」(のち教会合唱団)、および「日本バッハ聯合」を結成。バッハのオルガン曲、カンタータ、フランクのミサ曲など次々に演奏。讃美歌委員会に加わる。

1929(昭和 4) 2 月「音楽奨励会」解散記念演奏会に出演。6 月、バッハ《ヨハネ受難曲》初演。

1930(昭和 5) 日本橋・三越に設置されたパイプオルガンで連続演奏。ラジオ全国放送。

1931(昭和 6) 「讃美歌」(1903 年版)改訂のための讃美歌委員会・音楽主査を務める。改訂版『讃美歌』刊行。自作 8 曲を収録(90 番《あさひはのぼりて》ほか)

1940(昭和 15) 4 月 日本初の教会音楽学校「日本基督教教会音楽学校スコラカントルム」創立。

1948(昭和 23) 4 月 基督教音楽研究所(現キリスト教音楽院)設立。『メサイア』刊行。

1949(昭和 24) 10 月 渡米、空襲により破壊されたパイプオルガン復興のための募金活動を展開。

1960(昭和 35) 東京イグナチオ教会のオルガン設置に尽力、オルガニストに就任。コンサート「オルガン・メディテーション(オルガンの瞑想)」シリーズを開始。歴史的楽曲からメシアンに及ぶ楽曲を演奏。

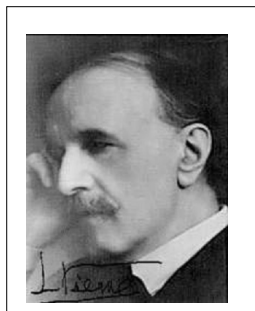
1964(昭和 39) 東京カテドラル聖マリア大聖堂のオルガン設置に尽力、オルガニストに就任。

1982(昭和 57)年 3 月 15 日永眠。享年 86。強靱な魂で日本オルガン界を牽引しつづけた一生を終える。生前に開催された演奏会数は 600 回に及んだという。

パリ時代の師



ヴァンサン・ダンディ
Vincent d'Indy
(1851-1931)



ルイ・ヴィエルヌ
Louis Vierne
(1870-1937)



シャルル= マリ・ヴィドール
Charles-Marie Widor
(1844-1937)

母校・明治学院



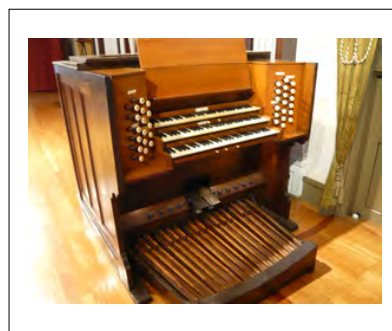
明治学院チャペル
ヴォーリズ W.M. Vories 設計
1916 (大正5) 年竣工
*ヴォーリズは南葵楽堂の設計者でもある。
(['明治学院 150 年史』2013 年刊より)

日本橋・三越での第 1 回オルガンリサイタル
1930 (昭和5) 年 11 月 16 日。当日は全バツハ・プロ。次回以降
のプログラムの予告もあり、フランク、リスト、ブラームス、サ
ンサーンスと広範囲にわたる。



日本橋・三越のパイプオルガン

アメリカ・ウーリッツァ社製シアターオルガン
1930 (昭和5) 年設置。
p.1・木岡肖像写真のオルガンはこの三越のオル
ガン。



木岡家蔵
森田真理子「木岡英三郎」より
*参考文献の項参照